

安部公房『他人の顔』論：仮面と行為

中野, 和典
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16017>

出版情報 : Comparatio. 6, pp.1-10, 2002-05-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

安部公房『他人の顔』論—仮面と行為—

中野 和典

I 顔という表象

顔とは何か。和辻哲郎によると顔とは人格の座である。人間は誰かのことを考えるとき、その顔を想い浮かべずにはいられない。顔は人間の存在にとって中心的な位置にある。もともとペルソナ（人格）という語は、劇に用いられる仮面を意味し、それが劇中の役を表すようになり、劇を離れて現実の生活における役割を意味するようになったのだという¹。花田清輝は顔とは全て仮面であると言っている。人間は自分の本当の顔を知らないため、仮面を使ってそれを探求する。本当の顔は自分以外のもので変貌しようと努めながら、しかも自分自身であり続けることによつて導き出せるのだという²。坂部恵によれば顔とは自身の側と他者の側からの「わたしは…である」という二つの限定が統一する場である。人間は常に何らかの役柄を引き受けることによつて一つの人柄を形成するのであり、必ず他者からの規定を受けている。人間は自分が他者にとつて他者であることを理解することを通じて自分を形づくるのだという³。

安部公房の『他人の顔』（一九六四年九月、講談社）⁴は、顔の喪失を題材にしている。「ぼく」は事故によつて顔に深刻な傷を負うが、「私」を一貫した誰かとして示し続けることを要求される現代社会において、顔の喪失はなにをもたらすのか。精巧な仮面づくりや妻の誘惑といった「ぼく」の苦闘を通じて明らかになるのは、人間がいかに顔に囚われているかということであるようだ。仮面を身につけ街に出た「ぼく」は、世界全体が「監獄」であり、人々は皆その囚人なのだと考える。「ぼく」に世界が「監獄」であると言わしめているものは何なのか。それが顔とどのような関わっているのだろうか。そして、「ぼく」は自分と同じように顔のために疎外されている朝鮮人や黒人、ヒロシマで被爆した少女に

共感を寄せる一方で、ある違いも感じている。それは世界が「監獄」であるという認識とどのように関わっているのだろうか。
本論では、以上のことを検討しつつ『他人の顔』における顔という表象が持つ問題の広がりを見明らかにしたい。

II 世界の「監獄」性

世界全体が「監獄」であるという「ぼく」の認識は、大きく二つの段階を経て形づくられる。まず、「ぼく」ひとりだけが「独房」に囚われていると認識する段階。次に「ぼく」だけでなく、他の人々もみな「監獄」に囚われていると認識する段階である。

「ぼく」だけが「独房」に囚われているという認識は、「ぼく」の孤絶感の深まりから生まれている。顔を失ったときから「ぼく」には、なぜ人間の容器の一部でしかない顔のために大騒ぎをしなければならぬのか、という不満があつた。人間は、その人が果たしている社会的な役割によつて評価されるべきではないのか。人間の本性は「内面」（人格や能力）にあり、「表層」（顔）にこだわるのは不合理だ、というわけである。

これに反する見解は、医師のKによつて示される。Kの主張の中で注目すべき点は次の二点だろう。第一に、人間は「あなたは…である」と他者から認められた自分と、「私は…である」と自認する自分とを照合することによつて、「私」を了解し維持しているのであり（他人の目を借りることではか、自分を確かめることも出来ない）（思）⁵という自己同一性についての指摘。「ぼく」がいかに「内面」にこだわるうとも、それは他者と無関係に成立しているものではなく、他者からの承認なくしては肝心の「内面」も破綻してしまうということ。第二にその他者からの承認の基盤にあるのは顔、特に表情であるという指摘。人間は互いの表情を指標として、相手は自らの発言や行動にいかなる意味づけを行っているか、相手は自分をどのように評価しているのか等を推し量り、自分も示しつつ関係を築く。表情は人間の「内面」を象る記号体系としてコミュニケーションの場で機能している。

表情を記号体系として流通させることによつて「内面」が成り立っているのだとすれば、顔に「内面」を対立させることはできない。「ぼく」

は「表面」(顔)を失うことによって「内面」までがそこなわれてゆくという困難に直面している。雑踏の中で、自分の周りにだけ疫病地帯のような隙間が空いているのを見て「ぼく」は思う。

まるで監獄の中だと思ったりした。監獄の中では、重苦しくせまってくる壁も、鉄格子も、すべて研ぎすまされた鏡になって、自分自身をうつしだすにちがいない。いかなる瞬間にも、自分から逃げ出せないというのが、幽閉の苦しみなのである。ぼくも、自分自身という袋の中に、嚴重に閉じ込められて、さんざんもがきまわって来たものだ。(黒)

「ぼく」は群衆の中にいて、しかし、その一員ではない。都市においては各人の匿名性が高まるはずだが、群衆(他人たち)に許容されるのは「誰であるかは明確ではないが、誰かではある」という匿名性であって、包帯で覆面をした「ぼく」のように「誰かではある」ということ自体を覆い隠してしまうような匿名性ではない。顔を覆うことがそれほどの緊張を生むのはなぜなのか。

産業社会は、高性能のテクノロジと持続的な成長に基盤を置いている。そこではあらゆる技術が高度に専門化されるが、一方で流動的な分業と見知らぬ者どうしの厳密なコミュニケーションが必要となるために、ある年齢まで非専門的で標準化された教育が国家的な規模で行われるようになる。農耕社会のように、個人の社会化を地域集団が果たすということはなくなり、自己再生産的な小集団は成立しなくなる。産業化は都市化を伴って進行する。分業や空間の効率を高めるための人・物・情報の都市への集中。日常生活における個人々の匿名性が高まる一方で排他的な衝動も大きくなる。人々は常に見知らぬ他者に接近したまま生きるのであり、そこで端的な記号としての顔がより重大なものとして機能するようになる。顔を覆い隠すことが重大な規則違反とみなされるのはこのためである。

「ぼく」も群衆の同質性志向を排他性の裏返しとして敏感に感じ取っている。流行は(大量生産された今日の符牒)(黒)を表す制服であり、(彼等の顔は、アメーバのように互いに偽足をのぼしあつて鎖)(白)をつくっているのだ。異端者として閉め出されたことよる群衆との距離が「ぼく」にそれを発見させている。仮面をつける前の「ぼく」には「同

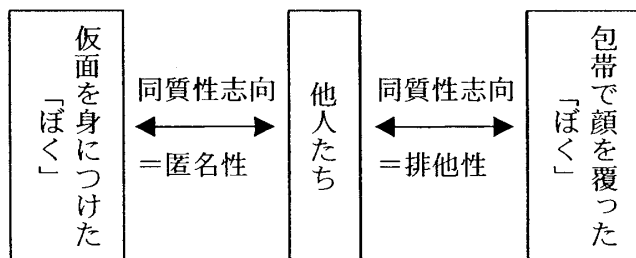
質性志向||排他性」という様相が見えている。しかし、同質性志向は単に排他性の現れであるだけではない。流行で身を装い、(検定済みの顔)(黒)を示して群衆にまぎれることは、個性を希薄化することでもある。仮面は「ぼく」に同質性志向のそのような側面を示す。

それら、見るがいい、休日でもないのに、この雑踏……人が集まるから、雑踏になるのではなく、雑踏があるから、人が集まってくるのだ。(略)ほんの束の間、空想でもいいから、誰でもない者になるうとして、雑踏の中にまぎれ込んで来ているのさ。(白)

同質性志向は誰でもない者になりたいたいという人間の願望の現れでもある。仮面が示したのは「同質性志向||匿名性」という側面であった。「他人の顔」における仮面の最大の特徴は、それが仮面であることを周囲に知られないままに群衆の一員になりきることができるところにある。包帯で顔を覆った「ぼく」のように排除されることなく、しかも誰であるかを不明確にする仮面。

これによって「ぼく」は全誰でもない者になりえている。仮面をつけた「ぼく」の匿名性が完全であるのに対して、人々の匿名性は不完全であるという、その差異から生まれた人々との距離が「同質性志向||匿名性」という側面を浮かび上がらせている。先に述べた「誰であるかは明確ではないが、誰かではある」という群衆に許容される匿名性の限度も、この排他性/匿名性の緊張関係から生まれていると言えるだろう。

個性性を希薄化しようとするのは、人々が一貫した「私」で在り続けることから逃れたいという願望を持つているからに他ならない。それは、社会化され記号化された役割に収まりきれない何かを求める行為だと言えるだろう。現代における高度の分業構造は、特定の技術を身につけた人間どうしの結びつきが高い自由度を持つこと



によつて成立している。関係の自由度の高さは、各人が労働者・消費者・有権者などの社会的な役割をより記号化（規格化）されたものとして引き受けることによつて可能になる。無論、存在の全てが社会的役割に還元されるということではなく、より記号化された役割を要求される諸関係において機能しているのが、いわゆる人柄的側面より役割的側面であるという、その比重が変容しているということである。このように自他を極力記号化・抽象化しつつ結ぶ人間関係は、他者に対する想像力を減少させ、共感を制限するものである。

なにぶん、隣人と、敵とが、もはや昔のようには、誰の目にも容易に見分けがつくはつきりとした境界線で区別されなくなつてしまつたのが、現代である。（略）そこで《すべての他人を隣人に》などという、救済思想が生れて来もしたのであるが、なにぶん億の単位で数えなければならぬ他人である、どこにそれほど膨大な想像力の貯蔵がありえよう。（灰）

血縁と地縁を社会的関係の基盤としていた産業社会以前とは異なり、他者は（比較的）豊かな連帯感を持つことができる存在ではなくなつた。「敵」として現れる他者に囲まれていく上に、人間は、顔（表情）を記号体系として流通させながら生きることを要求される。人間は自分の顔を人柄（内面）を象る素顔だと思つていくかもしれないが、その実、顔

は役割（記号化・規格化された社会的役割）を象る仮面にしかすぎないのではない。役割を象る仮面が先行し、それを追うように「内面」が形成されているだけではないのか。無論、人間の顔は全てが仮面なのであり、本来的な素顔を想定すること自体が誤りである、という見方もあるだろう。そうだとすればその仮面の質が問題なのである。

人々が（魂の顔）（灰）を失つていくという「ぼく」の思ひは、役割を象る仮面の先行を指摘したものであった。というよりむしろ、「ぼく」の「仮面体験」自体がそれを明確に象るものであった。「ぼく」は仮面を身につけて以来、しだいに自分の行動を制御できなくなる。（仮面の人格は、（略）素顔の門衛からきびしく出入りを差し止められていたため、つい意識されずに来てしまった、ぼくの一部分にはかならないはずである）（白）と言いながらも、仮面と「ぼく」の関係は（すっかり主客が転倒）

（白）してしまふ。この転倒こそ、先行する仮面に「内面」が従うという現代人の在りようの戯画であつた。したがつて、顔の喪失は「ぼく」だけの運命ではなく「監獄」に囚われているのも「ぼく」ひとりではないのである。

この監獄の巨大さは、どうも只事^{ただごと}ではなさそうだ。考えてみれば、無理もない。彼等が問われている罪名が、顔を失つた罪、他人との通路を遮断^{しだ}した罪、他人の悲しみや喜びに対する理解を失つた罪、

他人の中の未知なものを発見する怖れ^{おそ}と喜びを失つた罪、他人のために創造する義務を忘れた罪、ともに聴く音楽を失つた罪、そうした現代の人間関係そのものを現わす罪である以上、この世界全体が、一つの監獄島を形成しているのかもしれないのだ。（灰）

世界全体が「監獄」であるという認識は、生理的に顔を失つた「ぼく」と人々との差異による「独房」の意識を、仮面をつけた「ぼく」と人々との差異の発見から敷衍することによつて成立している。

III 顔と時間

世界の「監獄」性に関する以上の議論は、観念的過ぎるという印象を拭えないだろう。これだけならば、『他人の顔』は「魂を象る本来の顔を失つた現代人の悲劇」を戯画化しているにすぎないことになる。しかし、『他人の顔』は顔と差別の構造との関係を追求することによつてより深刻な問題を提示しているのである。ミシェル・フーコーは、監獄の特徴として時間による刑罰の正確な数量化というものを指摘しているが¹⁰、『他人の顔』における「監獄」にも時間の問題が密接に関わつて¹¹いる。顔と差別との関係は「在日朝鮮人」¹²と黒人、そして「原爆乙女」¹²の挿話を通じて追求される。

「在日朝鮮人」をめぐる挿話は三つある。（一）より朝鮮人らしく見えるために整形手術を受けたという日本人と混血の朝鮮人の挿話¹³、（二）仮面を初めて身につけた「ぼく」が朝鮮料理屋を訪れる挿話、（三）

「ぼく」が勤める研究所で朝鮮人の渡航問題についての署名をする挿話である。「在日朝鮮人」が存在するのは、日本が朝鮮に対して一方的な領事裁判権を持つにいたった江華島条約（一八七六年）、土地の収奪や日本での強制労働などの植民地政策を行った韓国併合（一九一〇年）、第二次大戦中の強制連行など、明治期以降の日本による朝鮮侵略に端を発する。日本の敗戦によって、植民地支配から解放された多くの朝鮮人は母国に帰還したが、朝鮮半島における政治的・経済的な混乱の中で、約六〇万人足らずが日本に留まった。そのような人々に対して、日本政府はサンフランシスコ講和条約の発効（一九五二年）の際に日本国籍を剥奪（韓国併合以来日本国籍にされていた）、戦争遺族の援護法（一九五二年）の対象外にする一方で、戦争犯罪人としての処罰は「旧日本軍の軍属」として負わせた。その他にも参政権の剥奪（一九四五年）や指紋の押捺義務（一九五二年）など、「在日朝鮮人」への処遇は差別的なものであった。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）への渡航は国交が正常化されていないことを理由に認められていないが、一九五九年一月から北朝鮮への帰還事業が始まった¹⁴。（三）で「ぼく」が署名している「朝鮮人の渡航問題を、どうにかするための署名」は、この帰還事業か、未だ実現していない自由往来を求めするための署名運動だったと考えられる。

このような「在日朝鮮人」の形成過程を見る限り、それらの人々を「日本人」が蔑視することには全く正当性がない。しかし、「在日朝鮮人」への差別は実際にある。なぜそのようなことが起こるのか。「ぼく」によれば、それは人間が顔に囚われているからである。「ぼく」は旧友と語る。

「民族問題にかぎって、言わせてもらえばだな、やはり無理だろうさ、顔だけにすべての責任をおつかぶせてしまうというのは……」

「では、聞くが、ほかの天体に住むかもしれない異星人のことを空想するときでさえ、まず、その容貌ようぼうについての臆測おそくから始めるというのは、一体どういうことなんだ。」

また別の場面ではこうも述べる。

最初から人間に顔がなかったとしたら、日本人だとか、朝鮮人だとか、ロシア人だとか、イタリヤ人だとか、ポリネシア人だとか、そんな人種差別による問題など、起こりえたかどうかとも疑わしい。

（灰）

差別の原因を顔に還元してとらえるのは極論であるように思われるかもしれない。しかし、顔と時間との関係を考えれば、顔への囚われは看過できない問題なのである。鷺田清一によると、顔という現象は何よりもまず時間的な出来事である¹⁵。

顔というものは、実際には純然たる視覚像としてよりもむしろ、ひととひとのあいだの共同的時間現象として出現する。表情はたえず移ろい、揺れ動き、漂うものであり、その前にわたしが立てば、わたしのそれとシンクロナイズするかたちで噛みあつたり、反撥しあつたりするものである。

顔を失った「ぼく」は周囲の人々との共同的時間を失っていた。

ホームの屋根を飾っている大時計……すべての人間に共通の時……それにしても、顔を持っている連中の、あの屈託のなさは、何どういうことなのだろうか？

（黒）

流行と呼ばれる、大量生産された今日の符牒だ。そいつはいつたい、制服の否定なのか、それも、新しい制服の一種にすぎないのか。絶え間ない変化という点では、制服の否定だろうが、しかしその否定が、集団的に行われるという点では、やはりきわめて制服的であるように思われる。おそらくそれが、今日の心なのだろう。そして、その心のせいで、ぼくは異端の徒なのだ。――傍点原文（黒）

ぼくを置き去りにほしくないが、じつとそばに付いていてくれるわけでもない。むしろ、家庭の主婦などというものは、いずれそんなものだろうが、ぼくが言いたいのは、その間のあまりに計算されすぎた均衡のことなのだ。たしかにおまえは手際てぎわよくやっていた。ぼくたちの沈黙に、不自然さを与えまいとして、電気天秤ほどの正確さで、見事に時をさばいてくれた。

（白）

顔を失って以来、「ぼく」は他者たちが共有している時間から閉め出されている、という感覚を拭いきれない。だからこそ仮面をつけた「ぼく」が最も重要な他者と認める「おまえ」を誘惑するときに、心中で次のよ

うに叫ばざるをえなかつたのである。

さあ、時間よ、ぐんぐん凝縮をつづけて、ぼくら二人だけを包む壺つぼになってしまふがいい。そうすれば、壺ごと街を横切つて、たどり着いたところが、そのままぼくらの新床にいどになつてくれるというわけだ。

(灰)

顔の喪失は他者との共同的な時間の喪失につながっている。逆に顔への囚われは、他者との共同的な時間の内に囚われることであるとも言えるだろう。「ぼく」が差別の原因を顔に還元して語ることには、差別者と被差別者との間に共同的な時間が成立していないという訴えが含まれているのである。「日本人」が「在日朝鮮人」を差別の対象にしうるのは、それが日本の朝鮮侵略に端を発する存在であるということを見ないとき（あえて「知らないとき」とは言わない）だけである。「在日朝鮮人」が負わされてきた時間を全く考慮せず向い合うとき、「日本人」の中に不信と排除の衝動が生まれる。それは、アメリカの黒人差別についても同様の事がいえるだろう。アメリカの黒人奴隷制度の成立（一七世紀）、南北戦争（一八六一年）など、アメリカ黒人が負つてきた時間を見ないときにおいてのみ「非黒人のアメリカ人」は彼らを蔑視することが可能になるのだ¹⁶。

シンクロニスム

顔の同時性に囚われることと、前節で見た役柄（記号化・規格化された社会的役割）を象る仮面の先行とは別のことではない。役柄とは本質的に他者との関わりにおいてだけ成立するのであり、その基盤には共同的な時間が不可欠である（例えば共同的な時間なしには契約は成立しない）。記号体系として表情を流通させることが、コミュニケーションを支えているのだから¹⁷、役柄を象る仮面の比重が増すほど顔の同時性への囚われは大きなものになる。

無論、人間が共同的な時間の内に在ること自体を否定することはできない。しかし、仮面の質を問うことができるように、共同的な時間の質を問うことはできるのである。顔の同時性と差別の構造との関係を考え

るとき、「他人の顔」の結末近くで語られる映画「愛の片側」は深刻な意味を持つ。この映画の主人公「娘」は広島原爆のために負傷、顔の右半分がケロイドを負つている。「娘」は旧陸軍の精神病院で奉仕活動をしているが、その患者たちは（敗戦の事実も知らず、二十年前に停止してしまつたままの時間のよどみの中で、忠実に過去を生きつづけている）（逆）のだった。「娘」は外形よりも生命そのものが人々の関心のなるよう、戦争が再び始まることを待ちわびている。「娘」もまた世界と共通の時間を失つているのだ。しかし、「娘」の調子には他者を責めるところは一切ない。ただ顔の傷を自分の負つた「悲劇」として引き受けて自殺を決意し、白い鳥のような美しいものとして海に消えてゆく。「ぼく」はこの映画に（醜いあひるの子の物語は、かならず白鳥の歌でしめくくられるものと相場がしまつていらいらしい。御都合主義もいところである）（逆）と非難するが、「娘」のような可憐で自己犠牲的な「原爆乙女」の像は、実際に形成されたものであった。戦後、被爆者たちは身体的・精神的な傷を負つたのに加え、就職や結婚の際に差別を受けることも多かったが、特にひどい傷を負つた女性たちは「原爆乙女」と呼ばれ、疎外される一方で広く同情を寄せられる存在でもあった¹⁸。一九五五年五月には、米国のボランティアに招かれて整形治療を受けるために二五人の「原爆乙女」が渡米した¹⁹。ほか、著名人による募金や「原爆乙女の歌」の制作・発表²⁰などを通じて救援活動が行われた。畑中佳恵は（東京朝日新聞）における「原子」関連記事の研究を行った論考の中で「原爆乙女」について次のように述べている²¹。

一見単純に見える原爆乙女の「リアル」さは錯綜している。身体を持った存在として、（封印されているとしても）責任を要求してくる可能性を持った存在として、「矮小化されない原爆体験そのもの」を（象徴的にだが）突きつける存在として、「原爆乙女」は「リアル」であった。が、その「リアル」さは、実際には責任問題と関わらない、実際には不可視な心の傷（のみ）が問題である、多くの被爆者の中から選抜された象徴的な存在である、という意味で非「リアル」であることを隠蔽した見かけ上のものだった、ということである。傷を負わせた者の責任を問わず、「悲劇」に耐え、世界平和を願う自己犠牲的な「原爆乙女」像の形成。周囲から期待され、（あるいは自らの苦悩から解放されるべく）女性たちはこの「原爆乙女」の役柄を引き受けて

いった。これこそ戦後期の日本において、自らを「戦争の犠牲者」と見なす「日本人」の自己同一性の形成と、米国への経済的・政治的・軍事的な依存関係とを反映する言説空間の中で作られた御都合主義的な「他人の顔」ではなかったか²²。顔とともに他者との共同的時間を失い、顔を回復し時間の共同性を取り戻すことが、そのまま役柄を象る仮面から「内面」を作り出すことでもあったという転倒。その転倒の裡に生まれた歪みを「原爆乙女」像の成立過程は象徴的に示している。

このように、顔と差別の構造との関係を時間の観点から追求することによって、『他人の顔』における世界の「監獄」性はより深刻な囚われの様相を示しているのである。

IV 世界の暴力性

「ぼく」は（ぬけぬけと朝鮮人に親近感を抱いたりしていた、浅薄な自己欺瞞）（白）を自覚している通り、もともと被差別者に対して特別に同情的な人間だったのではない。それらの人々に共感を寄せる一方で、「ぼく」はある違いも感じている。

同じ偏見の対象になつていっているといつても、ぼくの場合と、彼等の場合とは、まるで次元が違うのだ。彼等には、偏見の所有者を嘲笑する権利があるが、ぼくにはない。彼等には、偏見に対して力を合わせる仲間がいるが、ぼくにはない。

（白）

ぼくと、黒人とのあいだには、偏見の対象にされているという以外には、ほとんどなんの共通点もない。黒人には、結び合う仲間がいるが、ぼくはまったくの一人だけだ。黒人問題は、重大な社会的問題になりえても、ぼくの場合は、あくまでも個人的な枠にとどまり、

そこを一步も出るものではないのだ。

（逆）

「ぼく」は顔の喪失そのもの以上に、自分が背負い込んだ課題を他者と共有できないことに絶望していたのだ。仮面を作りたいいきさつから、それを葬ることを選んだ事情までをつづつた「おまえ」宛の三冊のノートは、何より、顔を失ったことによつて「ぼく」が直面した苦悩を「お

まえ」と共有したいという願いから書かれたものだったのである。顔の喪失が、程度の差はあるにせよ「ぼく」だけに起こったことではないこと、世界が「監獄」であるという認識も、顔の喪失という問題を「おまえ」と分かつために記述されたことであつた。三冊のノートの結び近くには次のような件がある。

すると、顔は、昔から明るみに出されていたものではなく、文明が、顔に白昼の光を当て、はじめて顔に、人間の中心が据えられたといふことなのだろうか……顔が在ったものではなく、作られたものだとすると、ぼくも仮面をつくつたつもりで、じつは仮面でもなんでもなく、あれこそがぼくの素顔で、素顔だと思つていたものが、じつは仮面だつたというようなことも……

（灰）

現代における顔の位置づけが人間にとつて必ずしも本質的なものではないこと、顔と人間との関係を変えてゆく可能性があることを示すために三冊のノートは書かれていた。しかし、このような「ぼく」の呼びかけに対する「おまえ」の応答は、徹底的な拒絶であつた。

あなたは、何から何まで、思い違いをしていましたね。あなたは、私が拒んだように書いていますが、それは嘘です。あなたは、自分で自分を拒んでいたではありませんか。その、自分を拒みたい気持は、私にも分るような気がしました。こうなつた以上は、苦しみを共にするしかないのだと、私も半ば以上あきらめてしまつていたのです。（略）仮面は、仮面であることを、相手に分からせてこそ、かぶつた意味も出てくるのではないでしょう。か。（略）けつきよく、仮面が悪かつたのではなく、あなたが仮面の扱い方を知らなさすぎただけだったので。（略）それにしても、恐ろしい告白でした。どこも悪くないのに、むりやり手術台に引き上げられ、用途も、使用法も分らないような、ややこしい形をした、何百種類ものメスや鉗子で、ところかまわず切り刻まれていようかと思ひました。（略）なるほど、おっしゃるとおり、世間には死が充満しているのかもしれない。でも、その死の種をまきちらしたのも、やはりあなたのような、他人知らずの連中の仕業だつたのではないのでしょうか。（手）

「おまえ」の主張には重大な誤りがある。「おまえ」は（愛というものは、互いに仮面を剥がしつこすること）（手）というが、これは仮面をはずせば、あとに顔が残らないという「ぼく」の苦悩を理解した上での言葉とはいえないだろう。「おまえ」は「ぼく」と苦しみを共にしているつもりだが、実は顔を持つ者の安易とした立場を一步も抜け出していない。「ぼく」は単に仮面のあらましを語りたかったのではない。仮面によって顔を取り戻すことができなかったという、その断念を伝えたかったのだ。何より、「おまえ」は「ぼく」が全く思い違いをしていた、というが、相手のことを理解していなかったのは「おまえ」も同様である。「ぼく」がノートで告白するまでは仮面の男の正体を「おまえ」に知られていないと信じていたことに「おまえ」は全く気づかなかつたのだから。

知ろうとして、知ることが出来るような、そんな生易しい他人ではない。この点についてなら、他人知らずという一と一言で、他人を射止められると思ひ込んでいるおまえの方が、よほど重症の他人知らずなのではあるまいか。（逆）

「おまえ」は「ぼく」と時間の共有を回復する可能性を持つ最初の（あるいは最後の）他者だつたのであり、その意味において「おまえ」は（第一号の他人）（白）だつた。「ぼく」は三冊のノートの前書きの手紙で次のように語っていた。

大事なのは、現にいまおまえが、この手紙を読みつづけていてくれることなのだ。ぼくの時間が、そのままそっくり、おまえの現在に重なり合っていてくれることなのだ。そして、引きつづき、ノートの方にも、そのまま読みすすんでくれること……ぼくがおまえの時間に追いつく、最後のページまで、投げ出すことなく読みすすんでくれること……

「ぼく」の書く行為に、「おまえ」の読む行為が重ねられるとき、ふたりの時間は共通性を回復させるはずだつた。しかし、「おまえ」は逆に「ぼく」に読むことを促すことによつて、訣別を宣言する。

そのつもりになつて、もう一度お書きになつたものを読み返してごらん下さい。あなたにだつて、きつと私の悲鳴が聞こえてくるにちがいありません。時間が許せば、その悲鳴の意味を、いちいち解説して差し上げたいくらいです。でも、うかうかしていると、あなたがここに引返してきそうで、恐ろしい。本当に恐ろしいのです。（手）

「ぼく」からの手紙の裏面に綴られた「おまえ」の手紙は、そのまま「ぼく」に書く、「おまえ」に読むの立場を逆転させようとするものであつた。「ぼく」と「おまえ」の間にはもはや埋めがたい時間の懸隔が生まれている。

あと三分もすれば、おまえは玄関に立ち、いつものように短く二つ、ベルを鳴らして……そう、あと二分……あと一分……

駄目だ、もう一度はじめから、やりなおすでしょう。あと五分……あと四分……あと三分……あと二分……あと一分……と、そんなことを繰り返しているうちにいつか九時になり、十時になり、とうとう十一時近くになつてしまつていたものだ。（逆）

ノート三冊を費やした呼びかけに、書いた本人が読めと応える「おまえ」それに従わず（灰色のノートを逆さに使つて、その余白に、最後のページから書き加えられた、自分だけの記録）を書くという「ぼく」の行為自体が「おまえ」への反論になつていよう。

仮面は素顔の代用品ではなく、自分以外の何かに変身するためのものだといふ「おまえ」の言葉とおり、「ぼく」は自分を超えたものになるべく再び仮面を手にする。仮面をかぶつた「ぼく」は、誰でもない者として顔の「監獄」を完全に抜け出した破壊者である²³。〈怪物こそ犠牲者の発明品にほかならない〉（黒）。通り魔・痴漢化し、見知らぬ他人を襲撃するこの理不尽な暴力性はもはや「ぼく」だけのものではない。それは「他人の顔」そのものと化した人間が表象する世界の暴力性なのである。

注

- 1 和辻哲郎「面とベルソナ」（思想）一九三五年六月
- 2 花田清輝「仮面の表情」（群像）一九四九年三月
- 3 坂部恵「仮面の解釈学」（一九七六年一月 東京大学出版会）
- 4 「他人の顔」は一九六四年一月に「群像」で発表されたのち、大幅に加筆・改稿して同年九月に単行本化され、「他人の顔」として講談

社より出版された。本論では単行本のテキストを定稿として論の対象としている。

5 (黒) (白) (灰) (余) (手) は、それぞれ『他人の顔』の『黒いノート』『白いノート』『灰色のノート』『灰色のノート』を逆さに使つてその余白に、最後のページから書き加えられた、自分だけのための記録『妻からの手紙』からの引用であることを示している。

6 ここである産業社会とは、工業(第二次産業)を主な経済的基盤とする社会である。それ以前の農耕社会や、(情報が物質的な資源と同等以上のものとして流通する) 情報社会とは相対的に区別される。産業社会の考察については、アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』(二〇〇〇年一月、岩波書店)を主な参考とした。

7 「人口の都市化は世界的趨勢である。人口の都市化率を世界全体でみてみると、1800年に約5%だったものが、20世紀半ばに29%、1985年に41%となり、2000年に47%、2025年には60%になると推計されている(藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』一九九九年七月、有斐閣 二五頁)

8 藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』(前掲)の第五章では、障害者福祉やホームレス等を例に挙げて都市社会における排他性の問題が考察されている。

9 「われわれが手放すわけにはいかない監獄のこうした『自明の理』は、第一に『自由の剥奪』という単純な形式に基礎をおく。自由こそが同じやり方で万人に属する善(幸福、財産でもある)、しかも各人が『普遍的で恒常的な』感情で結びつけられている善である、そうした社会で、どうして監獄がこの上ない刑罰とならないだろうか。それゆえ自由の喪失は、万人に同じ価値をもつわけで、罰金よりもすぐれる『平等主義的な』懲罰である。監獄のいわば法律面の明晰さ。しかも監獄を以つてすれば、時間(刑期)という変数にもとづく刑罰の正確な数量化が可能になる」(ミシエル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』(田村俶訳 一九七七年九月、新潮社) 二二二頁)

10 福岡安則は、『在日朝鮮人』という語について以下のように述べている。「なお『在日』という表現は『在日本』のつづまった言い回しであり、もともとは在日韓国・朝鮮人の当事者自身が使いはじめた言葉である。(略) 在日韓国・朝鮮人の日本への定住化は、否定しえない現実だ。にもかかわらず、定住外国人たる彼ら／彼女らを、日本社会

の構成員たちは、『在日』という言葉で呼びつづけている。「在どこそこ」という日本語の表現は、ほんらい、その国への一時的滞在を意味する言葉だ。すでに実態とは乖離した『在日』という表現を、日本人側がなんらの疑問も抱かずに使いつづけているということ自体のなかに、問題がひそんでいよう。つまり、彼ら／彼女らの定住化の現実から目をそむけ、彼ら／彼女らを日本社会を共に構成しているメンバーとして認めようとならないメンタリティが、『在日』という用語法の背後に透視されるのではないか、と思うのだ。『在日韓国・朝鮮人若い世代のアイデンティティ』一九九三年一月、中央公論新社) 一八頁。本稿においてはこの点に留意して『在日朝鮮人』という「」つきの表記をしている。

11 戦後、一九四五年八月の広島・長崎への原爆投下によって、ケロイドなど身体的に著しい外傷を負った若年の女性は「原爆乙女」と呼ばれていた。この呼称は例えば、『長崎原爆青年乙女の会』(一九五六年五月発足)のように、被爆者自身が自認していたものでもある。

12 いわゆる「朝鮮人らしい顔」というものが客観的な基準を持って存在するわけでないだろうが、鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』(一九八二年五月、岩波書店)の「日本の中の朝鮮」では、関東大震災(一九二三年)のときアマによつて起こった朝鮮人殺害事件の際に、千田是也が道端で朝鮮人とまちがえられて殺されそうになった、という出来事を取り上げられている。

13 朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)への帰還第一船(二隻)は一九五九年一月四日、新潟港から出港した。この時の帰還者は二三八世帯、九七五人。六一年半ばまで週に一〇〇〇人ほどの帰国者があったが、その後は減少した。八四年までに、計九万三〇〇〇人が帰国。鷺田清一『顔の現象学 見られることの権利』(一九九八年一月、講談社) 三七頁

14 『他人の顔』ではニューヨーク、ハーレムにおけるアメリカ黒人暴動が描かれるが、一九六四には実際に人種騒動が起きている。ジョン・ホープ・フランクリン『アメリカ黒人の歴史』(井出義光他訳 一九七八年一月、研究社出版株式会社)によると「国会の立法も、行政措置も、一九六四年のいわゆる「長い暑い夏」の特色であった暴力を止めることはできなかった。七月の半ばに、ニューヨーク市のヨーク

ヴイル地区で起こった暴力は、非番の警官によって一〇代の黒人少年が殺されたことから始まった。警察の残虐行為に対する抗議デモは、ハーレム、ベッドフォード・スタイヴサントその他にひろがり、暴動や掠奪をともなった(四七八頁)。「朝日新聞」にも「黒人デモ隊が警官隊と乱闘(一九六四年七月二〇日)」、「大統領選にも影響か(二ユーヨークの黒人騒動 深刻な人種危機感高まる)(一九六四年七月二五日)」といった見出しの記事がある。

顔が人と人とのコミュニケーションを支えているというのは、直接的に顔が見える場に限られたことではない。「我々は顔を知らずに他の人とつき合うことができる。手紙、伝言等の言語的表現がその媒介をしてくれる。しかしその場合にはただ相手の顔を知らないだけであって、相手に顔がないと思っているのではない。多くの場合には言語に表現せられた相手の態度から、あるいは文字における表情から、無意識的に相手の顔が想像せられている。」(和膳哲郎「面とペルソナ」前掲書)

「被爆青年、とくに女性の多くは、就職ができず、家にとじこもりがちであり、そのため交友関係もせまく、恋愛結婚の可能性もとぼしく、しかも仲人結婚も困難である、という状態におちいり、孤独と不安に苦しんでいます。」(山手茂「被爆者の生活」『原水爆被害白書』一九六一年七月 日本評論新社)

一九五五年五月から約一年半にわたる米国での「原爆乙女」の治療とその前後については、中条一雄『原爆乙女』(一九八四年三月 朝日新聞社)に詳しい。

広島では一九五三年に「ほゝえみよ還れ」(作詞佐古美智子(広島)の「原爆乙女」・作曲小林三千雄(当時巢鴨ブリズン囚人)が「原爆乙女の歌」として制作・発表された。同年、長崎でも「平和の陰」(作詞島内八郎(当時長崎市博物館勤務)・作曲木野普見雄(当時長崎市議会事務局長)という「原爆乙女の歌」が制作・発表された。

畑中佳恵「メディアの「原子」」(東京)朝日新聞』という言説空間の中で(下)。(『敍説II』第一号 二〇〇一年一月)

『壁あつき部屋―巢鴨BC級戦犯の人生記』(一九五三年二月 理論社)の川辺良二「原爆乙女の慰問」には以下のような記述がある。「六月十一日/朝食のお膳をとりいくついでに掲示板を見ると、十時ごろ原爆の乙女が慰問にくると書いてある。意味がわからないので読

み直したけれど、やっぱりそうである。おかしいと思った。原爆の乙女が戦犯を慰問する意味がわからない。(略)おれにはどうしてもわからないことが一つある。楠瀬という議員と谷本牧師と真杉静枝までが、なぜ彼女らをつれてきたかだ。戦争の悲惨さを知らせ、反省をもとめるためだとは思うが、彼等は結果がどうなるかを考えてからつれてきたのだろうか。結果はどうだろう。凶々しい年寄りどもは、彼女らとおなじアメリカの非道の犠牲者同士、同情しあつて握手をしたつもりになつてゐるのだ。

さらに悪いことがあるのだ。くらい運命を背負わされ、打ちひしがれた彼女らが、「神の恩寵」を知るほかに生きようがなかったという話はよくわかる。だから、彼女らが「わたし達は平和を愛する。いまは誰をもうらまない。あなた方のお気の毒な境遇に同情する」といった言葉は、ほんとうの天使の言葉だ。けれども、われわれは果たしてこれでよいのか。彼女らの天使の心はそれとして尊ぶが、それとは別に、人が本当に平和を愛するならば、平和の敵を憎まなければならぬはずだ。平和の破かい者を憎まないで平和が守れるだろうか。少なくとも戦犯者は、戦争の責任者かその忠僕ということになつてゐる。戦犯者を原爆の乙女が慰問して、たがいに涙を流しあつてよしとする考え方は、何としても納得できない。なるほど七年の日はたつてゐる。一切の過去は水に流そうといいたい時期にちがいない。だが、それでよいのだろうか。おれ達が最近の社会の動きの中に感じてゐる不安を、この問題はよく象徴してゐるように思う。戦争への反省、つまり、誰に責任があり、誰がだまされ、誰に犠牲となつたか、誰は許されるけれども、誰は永久に許されないと、徹しい反省を人は忘れてゐるのではなからうか。おそらく、彼女らの戦犯慰問をあつかう商業ジャーナリズムは、「いまは共に犠牲者たち、恩しゅうの彼方で手を取り合う」とでも書くにちがいない。罪を憎んで人を憎まずとか、一切を許すという言葉は、耳ざわりがいい言葉だけに、おそろしいおとし穴があると思う。

ちなみに、安部公房は一九五三年にこの『壁あつき部屋』をもとに映画シナリオ「壁あつき部屋」を書いてゐる。映画は一九五三年一月に完成。監督は小林正樹。

大江健三郎は「解説」(新潮文庫版『他人の顔』 一九六八年二月)

でこの通り魔・痴漢化を人間そのものとしての（ヒーローの魅力）をそなえることに成功した、と評価している。単なる認識者（見る立場）から行為者（跳ぶ立場）への移行という点ではそういえないかもしれない。

『他人の顔』の先行研究の多くは、これとは対照的に「ぼく」の通り魔・痴漢化を否定的に評価したものが多い。例えば、〈仮面の機能の無惨な末路〉と見る説〔佐藤泰正『他人の顔』（国文学解読と鑑賞）一九七一年一月〕、〈精神的な死〉であり〈完全な分裂状況〉に陥っていると見る説〔ウイリアム・カリー『疎外の構図—安部公房・ベケット・カフカの小説—』（安西徹雄訳 一九七五年六月新潮社）一一六頁〕、説得力を感じさせない（一種の甘え）と見る説〔福島章『他人の顔』についての散文的メモ』（ユリイカ）一九七六年三月〕、〈他人〉の真空地帯に到っているという説〔武石保志『他人の顔』試論—（書く）ことと（読む）ことを通しての「他人」—』（日本文学論叢）第一一〇号 一九八二年三月〕、顔の喪失という自己の運命を他人との共通の問題と捉えようとする「ぼく」は心理的な詐欺を行っているのであり〈十分な共感を生むものではない〉とする説〔田中裕之『他人の顔』論—その構想と形象—』（梅花女子大学文学部紀要）第二九号 一九九五年一月〕、罪の烙印を押されることでしか自己の存在を証明できないとしか考えきれなかった「ぼく」が〈さらに卑小な存在〉になっていると見る説〔波瀾剛『安部公房の『他人の顔』論—文章構成の形態とテーマをめぐって—』（文学研究論集）第一三〇号 一九九六年三月〕などである。しかし、「ぼく」が〈はつきりしているのは、せいぜい、孤独で見離された、痴漢になれるということだけだ〉（逆）と自覚しながら、その行為を選び取っていることに注目すべきだろう。それも、すべての他人に共通している内部の問題であることを強調しながら、である。つまり、『他人の顔』は一方で安易な共感を退けつつ、もう一方で問題を一般化する指向性を持っている。「ぼく」の（個人的な）行為そのものが問題ではなく、その行為と世界との関係が問題なのである。